古文化

受け継がれる、日本屋根の伝統美。

第122号

石山寺 多宝塔
［滋賀県大津市石山寺］

公益社団法人　全国社寺等屋根工事技術保存会

表紙 ● 古文化にロマンを求めて

大本山 石山寺（いしやまでら）

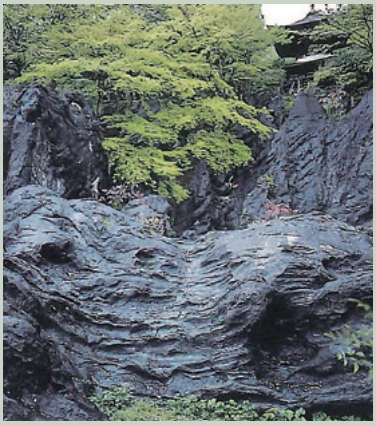
［滋賀県大津市石山寺］

本堂（国宝）／正面奥

開　創

さざなみが煌めく琵琶の湖水が、やがて穏やかな流れとなる瀬田川、石山寺はその西岸の伽藍山の麓の景勝地にあります。天平19年（747）、石山寺は聖武天皇の勅願により、良弁（ろうべん）僧正が建てられた寺院と伝えられます。良弁僧正は聖武天皇から、「東大寺の大仏建立にあたって黄金が不足しているので、黄金の産出を祈願するように」と命じられました。はじめは吉野の金峯山で祈願していた良弁僧正ですが、蔵王権現の夢告を受けて、この石山の地に辿り着きます。そして、岩の上に、聖武天皇から預かった聖徳太子の念持仏を祀って祈願したところ、陸奥国で黄金が発見されました。祈願が達成されたため、念持仏を移動させようとしましたが、岩から離れなかったので、そこに草庵を建てて寺院としたのが石山寺の始まりであると言われています。

天然記念物 硅灰石（けいかいせき）



硅灰石の下から多宝塔を見上げる光景
（石山寺パンフレットより転載）

「この山の上に八葉の蓮華のような大きな岩があり、そこは紫雲たなびく美しい場所である。ここが観音の聖地である。」『石山寺縁起絵巻』第１巻には、近江の守護神比良明神が石山の地についてこのように述べる場面が描かれています。このことから、石山寺は古来より神聖な土地として人々の信仰を集めていたことがわかります。

石山寺は、その名の通り石の山の上に建つお寺です。境内の本堂前にそびえ立つ大きな岩は、この付近に吹き出した花崗岩の熱作用で、石灰岩が変成した「硅灰石」と呼ばれるものです。通常は大理石となりますが、雄大な硅灰石となっているのは世界的にも大変珍しく、国の天然記念物に指定されています。本堂や多宝塔は、この「硅灰石」の上に建てられています。昔の人々は、奇岩とも言える「硅灰石」のこの山を、神仏のよりどころのように感じていたのではないでしょうか。

石山詣

平安時代には、特に宮廷の女人たちの間で観音堂に参籠し、読経しながら一夜を過ごすことが流行りました。紫式部は石山寺に参籠して「源氏物語」の想を練り、また、清少納言、和泉式部、「蜻蛉日記」の藤原道綱の母、「更級日記」の菅原孝標の女なども石山寺のことを日記や随筆に記しています。石山寺は、芸術家や文人たちに深い感応を引き起こし、女流文学の開花の舞台となりました。その後も、松尾芭蕉や島崎藤村をはじめ、石山寺を慕う文人たちを多く集めています。

国宝多宝塔（表紙写真）

源平の乱にあたって源頼朝の命を受けて戦った中原親能（なかはらのちかよし）は、石山寺の毘沙門天に戦勝を祈願し、事の成就に感謝して勝南院を建立しました。このとき源頼朝は、第二の姫の乳母であり親能の妻でもあった亀谷禅尼の請によって、多宝塔（国宝）を寄進したと伝えられ、下層の須弥壇上框裏面の墨書から建久５年（1194）に建立されたことが判明しています。

建立年代が明らかな多宝塔の中で最も古い多宝塔であり、鎌倉時代の当初の形を保つ遺構として貴重です。上層は円形、下層は方形平面の二重の塔で上下二層のバランスや軒の曲線が美しく、日本が誇る最古にして最美な多宝塔として知られています。

檜皮葺屋根の葺替修理を行い、平成24年に檜皮のやわらかな色合いが美しい姿に蘇りました。

多宝塔（国宝）
檜皮葺屋根と組物

主任文化財屋根葺士 検定会 実施される

檜皮・柿葺【第19回】● 令和元年10月14日(月)～10月19日(土)／1名(檜皮葺師)

茅　　葺【第11回】● 令和元年10月14日(月)～10月19日(土)／1名

［会場●山南ふるさと文化財の森センター］

今年度の受検者は檜皮葺1名、茅葺1名の2名で実施いたしました。5日間という限られた時間の中で、試行錯誤を繰り返しながら、目の前の模型と真剣に向き合う姿が見られました。最終日には、OFFICE萬瑠夢の村田信夫先生をはじめ、文化財保護の担当者の皆様とともに当会正会員も加わって査定を実施しました。実技検定と講義、筆記試験の各試験項目を受け、今回受検者は2名とも合格しました。

檜皮・茅葺実技検定

平成19年から始まった主任文化財屋根葺士検定ですが、経験年数10年以上の準会員のほとんどが受検し、認定を受けています。今後2～3年は該当者がいない状況となりますが、当会としては今後もこの様な検定会や研修会を通じて技術研鑽と資質の向上に努めてまいりたいと思っております。

最後に本検定にご協力を頂きました皆様に紙面を借りて御礼申し上げます。

査定の様子

主任文化財屋根葺士 認定証 更新講習会 開催

［会場●京都市文化財建造物保存技術研修センター］

去る11月15日(金)、京都府文化財保護課から鶴岡典慶建造物担当課長をお招きし、認定証の更新講習会を開催いたしました。認定日から3年毎に実施される講習会ですが、今年度の講習会にも多くの更新者が参加され、鶴岡様の講義に熱心に耳を傾けておりました。文化財修理の基本的な考え方、修理工事の実際について講義や発表をいただき、近年問題になっている柿葺屋根の早期劣化の状況や、解体時に出現した前回工事での問題点を先生の方からも問題提起していただきました。

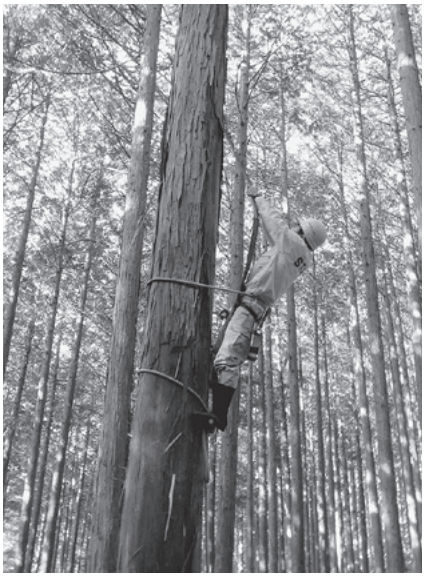
認定証保持者に求められるのは、現場をしっかりとおさめていくための努力はもちろん、こういった問題に対して的確に回答していくことのできる資質が求められているように感じます。保存会としても更なる資質向上のため、講習会や研修会を通じ、よりレベルの高い技術者を養成していきたいと思います。

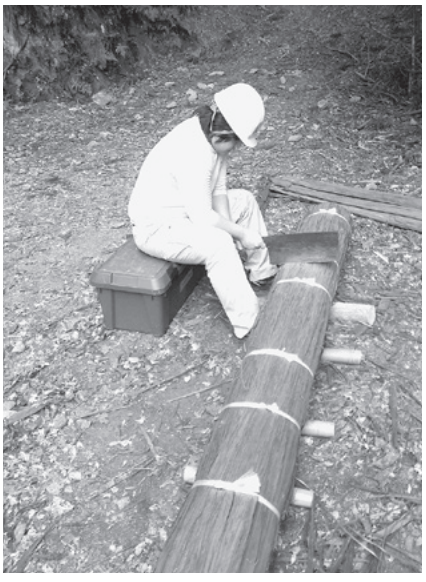
平成31年度
檜皮採取者(原皮師)初級養成研修18期生 終わる

平成31年度の檜皮採取者初級養成研修は、８月20日から23日の京都市文化財建造物保存技術研修センターにおいての座学研修を皮切りに、８月26日より河内長野市有林、京都市日向大神宮、那岐山国有林、秩父市有林、九州大学演習林にて荒皮の実技研修を行いました。また、９月26日、27日に岡山県の日羽八幡神社での檜皮採取技術査定会にも参加し、中級研修生とともに黒皮採取による査定を受けました。２月７日に全10クール６か月に及ぶ研修を終了しました。

長期間にわたる研修の中で、指導員の指導のもと、初めて行う作業に得るものが多かったと思います。この研修を、原皮師としてのスタートラインにし、なお一層の精進を心から願います。

研修林をご提供くださった国有林管理署の皆様、山林所有者の皆様に感謝申し上げます。今後ともご理解とご協力をお願い致します。





平成31年度
檜皮採取者（原皮師）中級研修 終わる

平成31年度の檜皮採取中級研修は、８月26日の宮島国有林から始まり、岡山県の両山寺、賤母国有林、三上山国有林、地獄谷国有林、京都市有林、別所国有林、城山国有林にて全14クールの研修を行い、２月７日に終了しました。

１クール２週間で入山し、限られた時間の中での作業になります。いつもは一緒に仕事をしない中級研修生たちですが、研修中は切磋琢磨し、より良い研修になっていると思います。

研修林をご提供くださった国有林管理署の皆様、山林所有者の皆様、各森林の関係者の皆様に感謝申し上げます。今後ともご理解とご協力をお願い致します。

平成31年度
檜皮採取者（原皮師）特Ａ研修 実施

平成31年度の檜皮採取特Ａ研修を２月10日から15日までの期間、平岡八幡宮境内林にて大野浩二指導員と研修生２名にて行いました。中級研修とは別に、大径木のある森で行う研修は、特Ａ研修生に特化したものになります。（※特Ａ：中級研修生の中でも特に技術力がある者＝Ａランク付けされた者が３年以上その技術査定の考課値を維持した者）今後も対象となる檜林において実施していきたいと思います。

昨年に続き研修林をご提供くださった平岡八幡宮の宮司様に感謝申し上げます。今後ともご理解とご協力をお願い致します。

平成31年度
茅葺中級研修

今年度の茅葺中級研修では、11月11日より埼玉県秩父市寺尾萩平の諏訪神社にて小麦藁葺替、１月20日より静岡県伊東市の大室山にて茅刈、また２月３日より茅としては初めてとなる事業所での葺替を行いました。

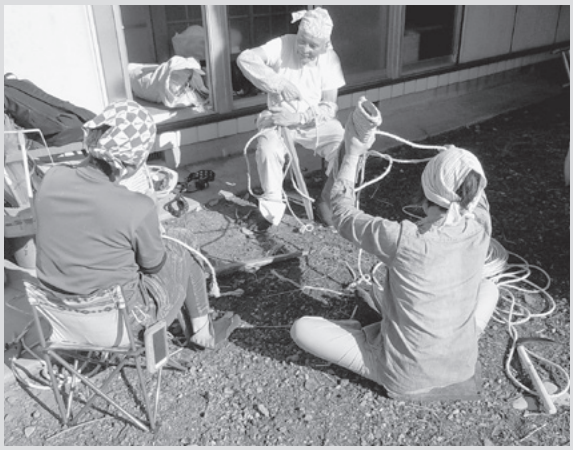
諏訪神社では当保存会の隅田隆蔵正会員、山田雅史正会員が指導にあたり、研修生は宮城、茨城、京都と全国より集まり、全国的にも珍しい小麦藁での葺替研修となりました。この少ない機会に隅田氏の技術を学ぶことができ、非常に有益な研修となりました。

茅刈研修では池総有財産管理会の御厚意により、区域内の茅刈を実施することができました。大室山では毎年「山焼き」が行われ、今も茅場の姿を残していて、茅を有効活用するべくご協力いただきました。

また、２月３日より現場研修として京都府南丹市美山町原において、山城萱葺（株）の現場内で葺替の研修を行いました。研修生は京都、滋賀と関西からのみの参加となりましたが、茅葺においては近い地域でもそれぞれ特色があることを実感でき、興味深い研修となりました。

それぞれの開催にあたり、ご協力いただきました地区の方々、行政の方々、諸先生方、関係者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

諏訪神社での小麦藁葺替



コテの縄巻きを隅田氏より教わる

平葺編み付けの指導

下地の垂木縛り

葺替を終えた諏訪神社

大室山での茅刈

刈り込みの様子

見本の束を講師より指導

束の縛り方を講習

干した茅の束ね直し

美山町での葺替

化粧茅の編み付けを指導

隅部の茅を整える

平葺押鉾の本締め

編み付けの様子

平成31年度
茅葺きフォーラム 開催

期　日 ● 令和元年11月21日（木）・22日（金）
会　場 ● 諏訪神社（埼玉県秩父市寺尾1012）
秩父地域地場産業振興センター
（埼玉県秩父市宮側町１-７）

平成31年度中級技術研修の期間中に、現場見学及び協議会を開催いたしました。今回は日本でも数少ない、小麦藁葺屋根の葺替研修でした。選定保存技術保持者の隅田隆蔵氏と山田雅史氏指導のもとでめったにない葺替に関わることができ、本当に有意義だったと思います。協議会では、文化庁はじめ、秩父市長、秩父市教育委員会教育長、地元関係者の皆様、全国から茅葺職人が集まり、活発な議論ができたと思います。

特に今回は全国で起こっている、原因不明の屋根の傷みについて、どうしておこるのか討論しました。環境の変化（温暖化、酸性雨）はもちろん、暮らしの変化（火を使わない暮らし）も関係があると考えられ、キノコなど菌類の影響等、何とか理由はつけられるかもしれませんが、本当のところはわかりません。ただ確実に言えることは、今の時代、技術交流は今回のような研修もあり盛んに行われ切磋琢磨しています。技術面では進歩していると思っております。それなのにこれほど耐久年数が悪くなってきたのは、自然環境の観点からも早急に考えなければならないときにきていると感じました。茅葺は世界を救う。心からそう思います。

本年もこのような考える機会をいただき、関係者の皆様に心より、感謝申し上げます。

見 学 会 「諏訪神社」

現場説明 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会　正会員 **山田 雅史**

協 議 会 「秩父地域地場産業振興センター」

開会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会　会長 **村上 英明**

来賓挨拶 ● 文化庁 文化資源活用課 修理企画部門　文部科学技官 **村上 玲奈**
秩父市長　**久喜 邦康**

講　　義 ● 筑波大学　名誉教授 **安藤 邦廣**　（一般社団法人 日本茅葺き文化協会　代表理事）

講　　演 ● 筑波大学　名誉教授 **安藤 邦廣**　（一般社団法人 日本茅葺き文化協会　代表理事）
題目「真葺きと逆葺き －古代日本の茅葺きを周辺諸国とあわせて考える－」

討 論 会 ● 議題「茅葺き屋根の現状、材料と環境の課題について」
［進行］公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会　正会員 **中野　誠**

総　　評 ● 文化庁 文化資源活用課 修理企画部門　文部科学技官 **村上 玲奈**

閉会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会　副会長 **大野 浩二**

見学会

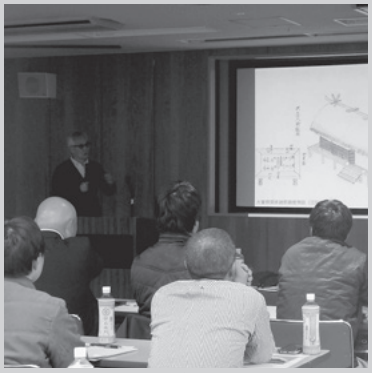
修理現場見学

現場見学・質疑応答

協議会

来賓挨拶 村上 玲奈様

来賓挨拶　久喜 邦康様



講義・講演　安藤 邦廣様

討論会風景

討論会風景

討論会風景

平成31年度
屋根板製作者養成研修を初めて実施

屋根板製作選定保存技術の保存団体として平成30年９月25日に認定を受けたことを契機に、今年度より屋根板製作者養成研修事業を開始しました。期間は11月25日（月）～12月６日（金）の12日間。研修生４名を対象に実施し、指導には選定保存技術保持者の栗山光博氏があたりました。杉材を用いて主に平板1.0尺×1.0分の製作工程を実習し、原木の見分け方、材の取り方、木取り方法の基本など一つ一つの工程を実際に見せながら指導し、研修生も熱心に聞き入っておりました。最初のうちは慣れない作業に戸惑いも見られましたが、工程を何回も繰り返すうちに理解度も高まってきたようで、最終日が近くなる頃には形になっていました。文化財建造物を適切に保存していくためには良質な資材の確保は欠かせません。研修生には、こういった研修を通じ、資材確保から屋根葺工事までを一連の流れとして理解し、我々の技術が森林資源に支えられていることを胸に刻んでいただきたいと願います。来年度以降も研修は続きます。保存団体として求められる役割は多岐に渡りますが、一歩一歩着実に進めていくためにも多くの皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

実習に取り組む研修生

「日本の技 体験フェア」開催
ふれてみよう！ 文化財を守り続けてきた匠の技

期　間 ● 令和元年11月9日（土）・10日（日）
会　場 ● 沖縄県立武道館
（沖縄県那覇市奥武山町52）

文化庁主催の「日本の技 体験フェア」に出展しました。今年度は34団体が参加し、各所には展示物や体験コーナーのブースが設営されました。当会は檜皮材料整形の実演と檜皮葺のデモンストレーション、事業内容のパネル展示、一般の来場者には竹釘打ち体験を行いました。

今回の来場者数は、3,500人余りと聞きましたが、今年もお子様連れの来場者が非常に多く、これからの日本を支える子供たちに文化財のことを知ってもらうことは非常に意義のあることで、ありがたく感じました。当会も今回のイベントを参考にさせていただき、「文化財修復の技術」をより多くの方に理解していただけるよう活動していかなければならないと感じさせられました。

くしくも、フェアの10日前に首里城が焼失してしまうという悲痛なニュースが飛び交う中での開催に戸惑いもありましたが、逆に文化遺産を後世に伝える伝統技法についての関心が高くなったのではないかと思います。沖縄の象徴でもある首里城が1日も早く復元されますことを祈念いたします。

説明に耳を傾ける来場者

会場風景

今年度のwebチラシ

竹釘打ちに興味を持つ子供たち

令和元年度　ふるさと文化財の森
「森が支える日本の技術2019公開セミナー」開催

一般の方々と当会の若手を対象として行う当該セミナーは、今年度で14回目となり、今回も清水寺、京都市、京都府、林野庁近畿中国森林管理局京都大阪森林管理事務所などの関係諸機関の協力を得ながらの開催となりました。

京都市文化財建造物保存技術研修センターでは、文化財建造物の保存に関する講演会の開催と、パネル展示による当会の檜皮葺、柿葺、茅葺の伝統技術の紹介、清水寺会場においては伝統技術の実演と体験、日向大神宮にて檜皮採取の一般見学会、鞍馬山国有林「古事の森」では一昨年の台風で倒木被害が起こったため、新たに檜の苗を植樹するなど多くの事業を行いました。

清水寺境内での実演・体験の運営を行うにあたり、今年度も京都府名誉友好大使に外国人観光客はじめ来場者への案内や説明、アンケート実施など多方面にわたってご協力いただき、感謝申し上げます。

今回も子供からご年配の方、また外国人の方々まで多数の来場者があり、文化財保護に携わる我々の技術や、それを支える資源について「見て」、「体験して」、より鮮明に認識していただけたのではないかと思います。最後になりますが、ご協力をいただいた関係諸機関、各関係者様にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

名　　称 ● 令和元年度 ふるさと文化財の森「森が支える日本の技術2019公開セミナー」
主　　催 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会
期　　間 ● 令和元年11月1日（金）・2日（土）・16日（土）、12月6日（金）
会　　場 ● 清水寺（京都市東山区清水1-294）
京都市文化財建造物保存技術研修センター（京都市東山区清水2丁目205-5）
日向大神宮（京都市山科区日ノ岡一切経谷町29）
鞍馬山国有林 古事の森（京都市左京区）
参 加 者 ● 約2,000名
共　　催 ● 京都市
後　　援 ● 京都府教育委員会、京都市教育委員会、林野庁 近畿中国森林管理局 京都大阪森林管理事務所、
公益財団法人 大学コンソーシアム京都、公益財団法人 京都古文化保存協会、
公益財団法人 京都市文化観光資源保護財団

開催内容

（1）将来の担手養成に関するプログラム

1.　文化財講座
［京都府教育庁文化財保護課
建造物担当課長 鶴岡 典慶 様］

京都市文化財建造物保存技術研修センター

（2）資材採取方法の実演、展示、研修

1. 檜皮採取実演
2. 資材確保への取組（パネル展示）
3. 資材を育む取組（檜の植樹）

(2) － 1　日向大神宮

(2) － 2　京都市文化財建造物保存技術研修センター

(2) － 3　鞍馬山国有林

（3）文化財講演会［京都大学 教授 吉岡 崇仁様］

京都市文化財建造物保存技術研修センター

（4）「未来につなぐ匠の技」～伝統的屋根工事技法の紹介～

清水寺 境内

（5）リーフレット等広報物の配布

清水寺 境内

（6）京都府名誉友好大使の活用

清水寺 境内

（7）特設 HP の作成と SNS を利用した広報の実施

平成31年度
特別講座 開講（全2回）

第2回「京の町を灯す提灯の文化」

奥川提灯店
8代目 奥川 忠司

日　時 ■ 令和元年12月7日（土）14：00～16：00
会　場 ■ 文化財建造物保存技術研修センター

今回の特別講座は、京都市下京区で８代に渡り提灯づくりをされている奥川忠司様をお招きし、江戸時代より広まった提灯の歴史等について講演いただきました。

【講演内容要約】

提灯の文化を継承して

創業して約280年、江戸時代中期から続く提灯屋の８代目として提灯製造に40年以上携わっております。「仕事の技術は自分のところで覚えろ、商売のことはよそで覚えろ」が家訓でありますので、大学卒業後には一般企業へ就職して３年間修行を積み、その後家業を継ぐために戻ってまいりました。奥川提灯店は、京都御所より南のほうにあり、この辺りは御所に物を納める職人の町でもありました。最初は扇子やかんざし、提灯など、竹製品の小間物を扱っていたようですが、これからの時代は提灯の方がいいのではないかということで、段々と提灯にシフトしていったように聞いております。そういうところで生まれ育ち、高校生の頃から家業を手伝い、現在も商売を続けさせていただいております。

時代に合わせた在り方

提灯は、そもそも火を守るための道具です。「提」は手に提げて持つという意味で、「灯」を手に提げて持つように作られたのが提灯なのです。江戸時代に世の中が平穏になり、夜に人々が出歩くようになってから庶民の間に広まったと言われています。そして、場所を取らずに仕舞えるようにと、独自に工夫、発展したのが、おりたたむことのできる日本の提灯なのです。蝋燭（ろうそく）が安価に出回るようになったこともあり、提灯は照明器具として、看板として、広く普及しました。全国各地で提灯が製造され、地域ごとの需要に合わせた独特の形状も作られました。

明治になり電気が生まれ、実用的に用いられてきた提灯の需要は徐々に減りました。現代では、古来より伝わる神社仏閣や祭礼での伝統的な用途として、また看板や装飾用として活用されています。竹の代わりにワイヤーを使い、和紙の代わりにビニールを使うなど、伝統的な要素を残しつつ最新の技術も取り入れ、現代様式に合わせた進化もしています。

提灯の歴史と製法

提灯には様々な形状があります。高張（たかはり）型は、江戸初期に武家で使われていた照明器具で、門前に張り出すように掲げたことからこの名があります。現代では、家紋や屋号を入れて寺社の門前や商家の店頭に、葬礼などで用いられることが多いものです。参勤交代などに見られる取っ手の付いた提灯は弓張（ゆみはり）型。馬に乗る人が使う馬乗（うまのり）型。馬が少々暴れて揺れても火が消えないように、竿の先端がバネになっている特殊な細工が施された提灯です。その他にも、丸型、寸切型、奉納型などがあります。

提灯の本体を「火袋（ひぶくろ）」と言います。その内側の骨に使われるのが竹ひごや割竹です。割竹は竹を縦にいくつもに割った表皮のついたもので、竹ひごはその角を取り、丸くしたものです。製法には、巻骨（まきぼね）式と地張（じばり）式とがあり

高張型

弓張型

馬乗型

丸型

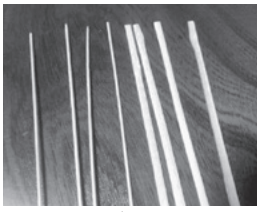
寸切型

奉納型

ます。巻骨式は、竹ひごを提灯の木型にらせん状に巻き付けたもので、骨並が美しいのが特徴です。地張式は、割竹を輪っかにし、順に並べて木型にはめ、糸で固定したものです。１本の竹を使わないと節の位置を揃えることができないため、竹には番号を振ります。骨が太いため接着面が大きく、厚手の和紙を貼ることができるので大変丈夫ですが、手間は掛かります。

受け継がれる伝統の技

提灯をきれいな円にするための、一番難しく手を抜けない作業が「タメ」になります。「タメ」とは、真っ直ぐな竹ひごを扱いて均一な丸みをつける作業です。骨を巻くための木型は、原則八枚の羽の組み合わせですから、タメできれいな丸みがついていないと、完成したときに八角になってしまいます。骨の上には均等になるように刷毛で糊を塗りつけ、少し水分を含ませた和紙をのせて、指でなでるように骨１本１本に貼り付けていきます。乾かしてから内側の木型を外し、骨と骨との間の紙を内側に折り込んで節目を付け、きれいにたためるようにします。


左／竹ひご骨、右／割竹骨

貼り上がった提灯に墨で文字入れをします。字の上手な人が提灯にも上手に書けるかと言えば、そうでもありません。大きな字になると、感覚が違ってくるようです。まず大きな墨を割ったときにできる削り墨を水の中に一晩浸けておきます。次に、軟らかくなった墨をすり鉢でする「墨すり」という作業をします。朝一番、最初の仕事はこの「墨すり」から始まり、一日分の墨を丁寧に作ります。墨には膠が使われているので、この膠の量が提灯の善し悪しを左右します。「墨すり」は大変な作業ですが、年月を経てその差が出てくるので気が抜けない作業です。

竹ひごをタメる作業

羽８枚の木型を組んだところ

それぞれの歴史を紡ぐ提灯

京都には祇園甲部、祇園東、先斗町、宮川町、上七軒の、総称して「五花街」と呼ばれる５つの花街があります。店先には、各花街によってデザインの異なる軒吊り提灯が吊られています。京都を代表する提灯として「五花街」は今なお風情を感じていただける場所となっています。また、京都を代表する「祇園祭」。ハイライトである「山鉾巡業」の山鉾を優美に照らす駒形提灯の灯りは圧巻の光景です。これには御神燈の意味があり、山鉾町ごとに駒形提灯のデザイン・数が異なり、氏子や町民の想いが込められています。映像関係ではテレビや映画に、特にハリウッド映画の「ラストサムライ」や「SAYURI」には提灯にかなりの予算が割かれるなど、舞台設定になくてはならない小道具だったようです。

未来を明るく灯す提灯作りを

戦前、京都市内にあった60件超の提灯屋は、今では数件にまでなりました。全国的に見ても提灯屋が姿を消した地域はあるようです。照明器具としての提灯の需要減、少子化による後継者不足など、その要因は様々ですが、現在は逆に物流・ネット網が拡大したことにより、遠方からの注文にもお応えできるようになりました。江戸時代には全国どこにでもあった、各地域・町内ごとに生活必需品としての提灯を製造する店は減りましたが、現代の日本において伝統的に必要とされる場面はまだまだ多くあります。

神社仏閣や祭礼行事のような伝統を重んじ、今後も変わらず継承していくことと、現代様式に合わせて進化させながら提灯を生活の中に残していくこと、この２つを両立させていくことが現在の提灯屋に課された使命と考えています。

灯を守ることから生まれた提灯。江戸時代から庶民の生活に溶け込み、現代でもその揺らぎに癒しを感じるものであります。奥川様にはご多忙にもかかわらず、歴史や製造方法について楽しい話を交えながらご講演いただき、本当にありがとうございました。

奥川　忠司氏プロフィール

京都市下京区出身。京提灯製造本舗「奥川提燈店」８代目店主。大学卒業後、一般企業への就職を経て家業である奥川提燈店に入社。実父である先代から提灯製造の技術を継承し、平成７年に代表に就任。提灯の製造には40年以上従事

[納品事例]（一部抜粋）

八坂神社／下鴨神社／長岡天満宮／建部大社／防府天満宮／厳島神社／高台寺／知恩院／東本願寺祖廟／京都五花街 軒吊り・舞台装飾／南座吉例顔見世

映像制作（東映・松竹・東宝）に加え、NHK製作の番組などからも依頼を受け、時代劇撮影用の提灯や朝ドラ（わろてんか・ちりとてちん…）用提灯なども製作。ハリウッド映画（ラストサムライ・SAYURI）にも提灯を提供。

発　行　所
京都市東山区清水二丁目 205-5
文化財建造物保存技術研修センター内

公益社団法人　全国社寺等屋根工事技術保存会

TEL 075-541-7727 FAX 075-532-4064
http://www.shajiyane-japan.org

古文化 第122号
令和 2 年 3 月 31 日発行

あ と が き

新型コロナウイルスが世界中に広がり、ついにWHOはパンデミックになったと宣言しました。日本では、小・中学校、高校などの休校を始め、各種イベントや春の選抜高校野球などの中止で大きな混乱のなか、経済活動の停滞は長期化しつつあります。東京オリンピック7月開催も危ぶまれ、世界経済の壊滅的打撃は避けられそうにもありません。

今、個々にできることは限られていますが、一丸となってこの困難を乗り越えるしかありません。それぞれに不安な毎日を送られていることと思いますが、引き続き体調管理と手洗いには充分努めてください。一日も早い終息を祈るばかりです。

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

●北から南から

ふるさと探訪

山香　正さんの古里

「謎多き宇佐神宮」

（大分県宇佐市）

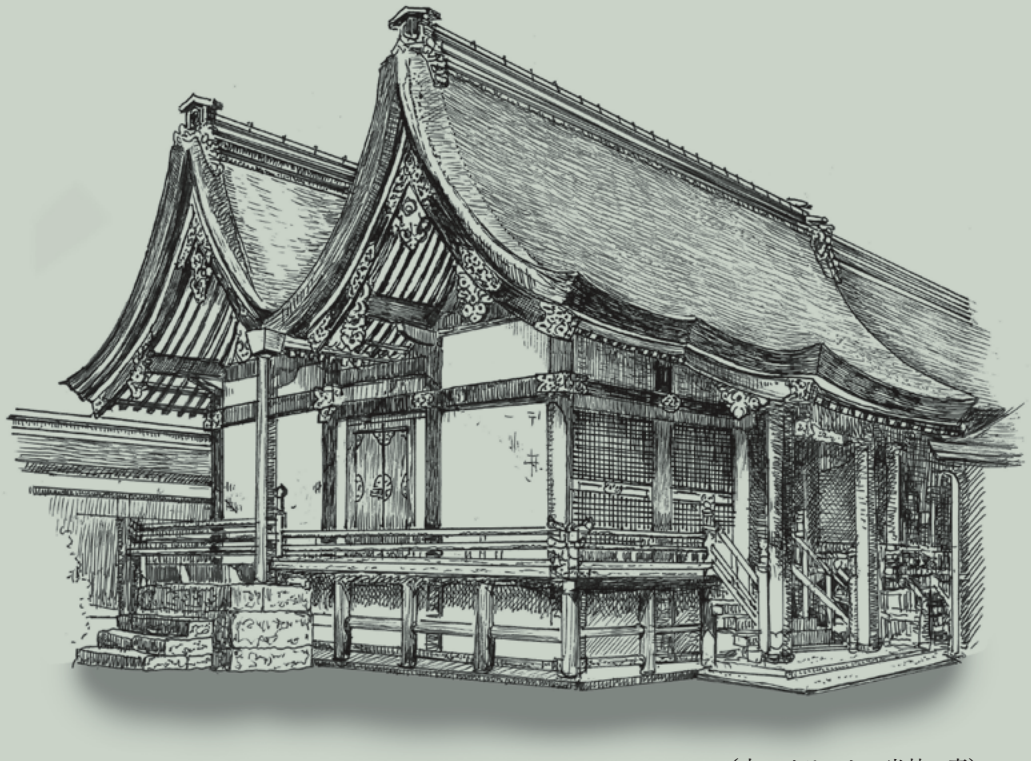
山香さんの故郷である大分県宇佐市には、かの宇佐神宮が鎮座している。「かの」と接頭語が付くのは、同神宮が日本史の根幹に関わる特別な存在であるからだ。

日本全国には8万余りの神社が点在しているが、そのうち神宮の社号を持つお社は伊勢神宮（三重県伊勢市）、平安神宮（京都市左京区）、明治神宮（東京都渋谷区）など30社ほどに限られている。神宮は、天皇や皇室の祖先を祀る社であり、宇佐神宮には八幡大神（はちまんおおかみ）と神功皇后、そして比売大神（ひめおおかみ）が祀られている。八幡大神とは応神天皇の神霊で皇室の祖先とされているがゆえに宇佐神宮は「神宮」の社号を持つ。全国に点在する八幡宮の総本宮であり、宇佐八幡宮とも呼ばれる。

奈良時代中期の769年、称徳天皇（孝謙天皇）の御代に日本史を揺るがす「宇佐八幡宮神託事件」が勃発する。女帝・称徳天皇は独身で子がなく、誰が次期天皇となるかが大きな関心事となっていた。その時、九州大宰府より宇佐八幡宮の神託として「道鏡を皇位につかせれば天下泰平ならむ」との内容が奏上される。道鏡は称徳天皇の信頼厚い高僧だが皇族ではない。神託を確かめるために天皇は和気清麻呂を勅使として宇佐神宮に派遣する。清麻呂が宇佐神宮の神前にぬかづくと大神が現れて「皇族でないものが皇位につくことはならぬ」と託宣。これによって道鏡が天皇となる道は閉ざされた。

皇位継承という大問題が他神宮の意見を聴くこともなく宇佐神宮の神託ひとつによって左右されたのだ。ヤマトから遠く離れた位置にありながら、宇佐神宮はなぜそれほどの存在感を示していたのだろう。

同神宮の中央にはこの地の古い地祖神である比売大神を祀る社殿が鎮座し、その左右に応神天皇、神功皇后を祀る社殿が設けられている。最も重要と思われる位置を占めながら、比売大神がどのような神であるかの明確な記録はない。次期天皇を決定付けるほどの権威を持っているのはこの比売大神なのだろうか。宇佐神宮は謎多きお社なのである。



（文・イラスト　米林　真）

古文化

第122号

公益社団法人　全国社寺等屋根工事技術保存会